# 1. 入学前 －1951～56年－

**東大野球部との縁**

高校３年の夏、二人の東大生が高知市の我が家に来られた。当時２年生で機械工学科に進むことが決まっていた**鈴木武春**さんとその野球部仲間の**坪田 宏**さんである。鈴木さんは、希望が丘高校時代に甲子園に出場し、東大野球部では１年からレギュラーの二塁手であった。当時助監督をされていた**竹田 晃**さん(昭和28年卒、教育大付属高校時代に甲子園に出場、東京大学教授・総長特別補佐をつとめる)が土佐高校の野球部に所属していた私が東大を受験することを高知在住の知人から知らされ、その勧めで勧誘に来られたのであった。私は自分の野球が大学で通用するとは思っておらず、また理科系に進むつもりでもあったので、大学では野球をすることは考えていなかった。鈴木さんの話を伺い、工学部でも野球部での練習が十分可能であることを納得した。両人は、「しっかり勉強して、まず入試に通ることですね」といった感じで、私が入学することを大して期待しているようには見えなかった。六大学野球で活躍するよりは、東大に入る方がまだしも容易であると考えていたので、東大に入学できれば、野球部に入部しようとこの時決心したのである。

**高校時代 －1954～56年－**

東大で野球ができたのも、高校時代に野球部にいたからである。高校時代のことを振り返ってみたい。高校では自分のピッチングでは通用しないと思い、すぐには野球部には入らなかった。当時の土佐高校**溝渕監督**(通称アラキ、荒木叉衛門の大フアンであり自分の店にアラキという名前をつけているのがその由来)は私の父の友人であった。父を通じて入部を勧誘されたが、私は断固として拒んでいた。当時の身長は１メートル50センチほどで、野球部はおろかクラスでも最も小さい部類に属していた。また、足はチーム一遅く、遠投もビリであった。とても高校の練習にはついて行けないと考えたからである。１週間でよいから練習に参加して欲しいと言われ、文字通り１週間だけでよければとの約束で練習に参加することにした。

その時たまたま、春の大会が始まり、投手は１年生しかいなかった関係で、初戦にいきなりリリーフに起用された。２～３点はリードしていたように記憶している。中学時代秋の県体で最後に投げて以来４ヶ月以上経っていた。しかも硬式のボールを握って４日間ほどしか練習していない。硬式の球は中学で使っていた準硬式よりもほんの少し大きい。そこで、縫い目に指を掛けないでボールを握る工夫をした。そうすれば、準公式の球と同じ大きさとなり、ほぼ同じ感覚で投げることができた。ボールの回転方向と縫い目との関係で、極端にいえば、球から円盤にほんの少し近づき、ボールが落ちたり、伸びたりする利点もあった。この球のお陰で３インニングを０点に抑えることができた。これが後日、大学で最も得意とする球になるとはその時思いもしなかった。

次の試合は先発であった。監督も無茶をするものである。春の選抜大会で準決勝まで進んだ高知高校が相手であった。この試合、立ちあがりからストライクがほとんど入らない。右打者に対し、ストレートがインコースを内側に少し外れてしまう。それを調整しようとすると今度はアウトコースを外側に外れる。微調整は極めて難しく、前日の工夫も全く忘れていた。ストレートのサインでこの球を

投げていたので、西山捕手(後に広島カープで活躍)もそれに気付かなかった。1回から3回まで同じような経過であった。「先頭打者に四球。次打者はバントで送り1死二塁となる。これで一塁が空き、四球を恐れず思いきって投げられる。そうすると、凡打、四球、凡打で無得点に終わる」3回まで6つの四球を出したが、失点はゼロである。コントロールが悪いという欠点が、打者にとってはかえって打ちにくいという長所に変わっていた。しかし、愚かにも、4回からカーブでストライクが取れるようになった。これが裏目にでて、ストライクになるカーブをことごとく打たれた。2点を取られて、なお、2死一・二塁に走者を残して降板の憂き目にあった。結局この回4点を与えてしまって、4対0でこの試合に負けたのである。約束の1週間が終り、私は皆に迷惑をかけただけで退部し、野球部から離れた。

ところが、溝淵監督は名うての頑固親父である。高校2年が終わろうとするある日、**大嶋校長**に呼ばれた。土佐中学校に入学以来、初めてのことであった。校長室に何事だろうとおそるおそる顔を出すと、野球部に入らないかとの話である。どう返事をしたか記憶にはない。しかし、結論はすぐに出した。もう一度野球をやろうと。高校2年間で身長が20 cm程伸びて人並みになっていたし、半年位なら体ももつだろうと思ったからである。早速、高校3年間クラス担任をして頂いていた富田先生のところにご相談、というよりもむしろご報告に行った。先生は中学野球部時代の監督でもあった。先生は反対であった。今から野球部に入っても活躍できないであろうし、入試には明らかにマイナスになるという至極当然な理由である。それは承知の上での私の決断である。まず、やりたい野球をやろう。甲子園へ行くのが先である。そして、入試はその後に考えればよいと。溝渕監督とお会いし、私の打撃については何もいわないことを約束して頂いた。体力のない私がピッチングに専念するためである。それを承諾していただき、再び練習に参加した。

そこには、キャプテンの福岡啓助(後に慶応大学で六大学野球のベストナインとなる)がいた。そして、土佐中学で共に戦った仲間たちがなんのわだかまりもなく暖かく迎えてくれた。3年生で中学時代に敵として戦ったのは石田投手(卒業後中央大学に進み、オープン戦で対戦し、東大は彼に完封された)だけであった。彼も同級生として温かく迎えてくれた。下級生の大部分は中学時代の後輩である。彼らも私を先輩として迎えてくれた。久し振りの練習は辛かった。毎日10時には就寝しなければ体が持たなかった。しかし、投げるのはやはり楽しく、毎日喜んで練習に参加していた。

その後、オープン戦には何回か登板したが、負けたのは三度である。高知の実業団チームと試合して、2アウト後に三塁打を打たれた後、本塁に盗塁されて1点を失った1対0の試合が最初であった。この試合修了後、直ちに、本盗を防ぐ練習をした。投手が少し気をつければ、本盗は絶対に成功しない。どのタイミングで走者を見れば良いかを納得するまで練習させられたのである。その後、私の野球生活で二度と本盗はされていない。二つ目は、県立尼崎高校との1対0の試合である。春の選抜大会で活躍した今津投手(後に中日で遊撃手として活躍)に無安打無得点に抑えられた。彼の高めいっぱいの速球に、わが軍はことごとく三振に討ち取られた。後年、私が高めの球を生かせるようになったのも、この時、彼のピッチングを目の当たりにしたからではないかと思う。三度目は、夏の大会直前に、土佐高のOBチーム(大学野球で活躍している先輩方がこの時期自分たちの練習がないので毎日後輩のために練習を手伝ってくれていた)と戦った5対0の試合である。OB側の投手は、現役の石田投手であった。翌日は、私だけは練習なし。この時は、試合を目前として、合宿していたので、自室待機を申し渡された。冬のトレーニングに参加していなかったので、連日の長時間の練習によって疲労

[illegible]たことに、後日気付かされる。

夏の大会を迎えた。１回戦は石田投手の先発で、私のリリーフ。２回戦は私の先発で、石田のリリーフ。いずれも楽勝であった。そして、いよいよ準決勝である。宿敵高知商業との対戦。この大会の組み合わせが決まるや、溝渕監督はこれに勝てば、甲子園行きだと我々に保証していた。そして、全ての練習を左腕小松(後に巨人に入団)打倒に絞ってこの試合に臨んだ。毎日左投手を相手のバッチング練習をしてきたのである。相手も石田投手を想定して、サイドスローのカーブを打つ練習のみを行ってこの試合に臨んだそうである。相手の松田監督も父の古くからの友人であり、父を通じてその話を聞いていた。私はノーマークであった。準決勝に勝った２チームが、徳島代表との南四国大会に出場できる。南四国大会のための練習は、準決勝に勝ってからでも十分できる。その３年前の土佐高校の甲子園準優勝も、高知県予選の決勝では負けた相手に南四国大会で勝って甲子園に出場して獲得したものであった。

この大事な一戦の先発は石田投手であった。監督が悩んだことを後で知った。先輩達との試合も、この試合の先発投手を決めるためであったらしい。私がそこで好投していれば、先輩たちにも異論がないだろうとの計らいであったと今にして思う。この大事な試合に、私が先発して負けると、今まで熱心に練習してきた石田にも悪い。先輩たちからは袋叩きに会う。

試合開始直後の１回表、高知商業の先頭打者はショートゴロ。これを１年生大橋(後に彼は捕手に転向、慶応大学で活躍し、巨人に入団)が一塁に大悪投して無死走者二塁となった。続く打者に連続して安打を打たれてこの回一挙に４点を取られた。２回からは私の登板である。その時、テレビでは石田投手をベンチに下げたのは間違いだと言っていた。私は全くの無名であった。私のカーブは石田投手よりもほんの少しだけ水平に曲がり、ストレートは少し伸びた。これが幸いして、彼の球で外野の前に落ちてヒットとなった当たりが、私の球では外野手の捕れる範囲まで飛んでしまうのである。８回終了まで一人のランナーも出さず、９回２死後に二塁打を打たれたのみ。私は自分の役目を果たせたのである。その間、ヒットで出た私と吉川を福岡が返して２点差となって、小松投手はノックアウトした。しかし、交代した投手には、私の場合と同様に準備不足で抑えられ、４対２のまま九回を迎えた。そして、９回裏の２死一・二塁、打者４番大橋の当たりはレフト頭上へと飛んだ。フエンスを越えればサヨナラ勝ち。しかし、打球は無常にもフエンス一歩手前で、あらかじめ後ろに守備していた左翼手のグラブの中に納まった。私達の甲子園が夢と消えた瞬間である。

試合後、投手起用について、監督はいろいろと言われたらしい。しかし、それは結果論であって、その判断は決して間違っていない。せっかくの監督の期待に応えられるピッチングを、大会前に見せられなかった私の未熟さが、アラキ監督を男にできなかっただけのことである。

その夜一人で桂浜の砂浜に寝転んだ。この半年間、毎日体調に気を配ってきたが、もはやその必要がなかった。夜のふけるまで空を眺めていた。そこで決心した。甲子園に行けないのならば、東大に入って野球をやろうと。それによって初めて、その日の空虚さが消え、闘志が戻ってきた。あの試合で投げていなければ、また既に述べた出会いが一つでもなかったら、私の人生も異なる道を歩いてい

**中学時代 －1951～53年－**

ここで、中学時代の野球を語りたい。それがなければ、やはりその後の野球人生はなかったであろう。1951年４月、250名の仲間と共に、母の勧める土佐中学に入学した。教育ママのはしりであった母の反対を押しきって、早速野球部に入部した。小学４年で野球と出会って以来、明けても暮れても野球の毎日であるわが子の将来を母は心配したのであろう。

野球部に入っても、ほとんど野球をやらせてもらえない。キャッチボール、トスバッチングそれに守備の控えの毎日であった。この控えというのは、守備の練習をしているレギュラーの後ろで、それと同じく左右に動くだけで、球を捕らしてもらえないのである。しかし、日が暮れるまでグランドに出ている必要があった。土曜、日曜も練習である。何人かの友人が部から去った。野球好きの私も、何度そうしようと思ったかしれない。それをついに実行することはなかった。親の反対を押しきって始めた道である。入った以上は最後までやろうと、毎日苦しい練習に耐えていた。３年になっても、その状況は変わらなかった。二塁手の補欠で、打力がないために、試合には出してもらえない。バッチング練習や守備の練習もほとんどさせてもらえない。春の大会は、我々の５年連続優勝で終わった。この大会では、１インニングだけ、守備につかせてもらった。

転機は突然訪れた。紅白試合の補欠側の投手を命じられ、レギュラー相手に投げることになった。この試合は延長戦となり、３対２で補欠側は負けた。しかし、このことは、他の中学よりも補欠チームの方がむしろ強いことを意味している。投手岡村の誕生である。以後、背番号は10となった。背番号１は、同級生の左腕剛球の上田投手であった。投手になると、二番手であっても、試合に出ることができた。上田投手と私とが交互に完投して優勝するのがそれからのパターンとなった。

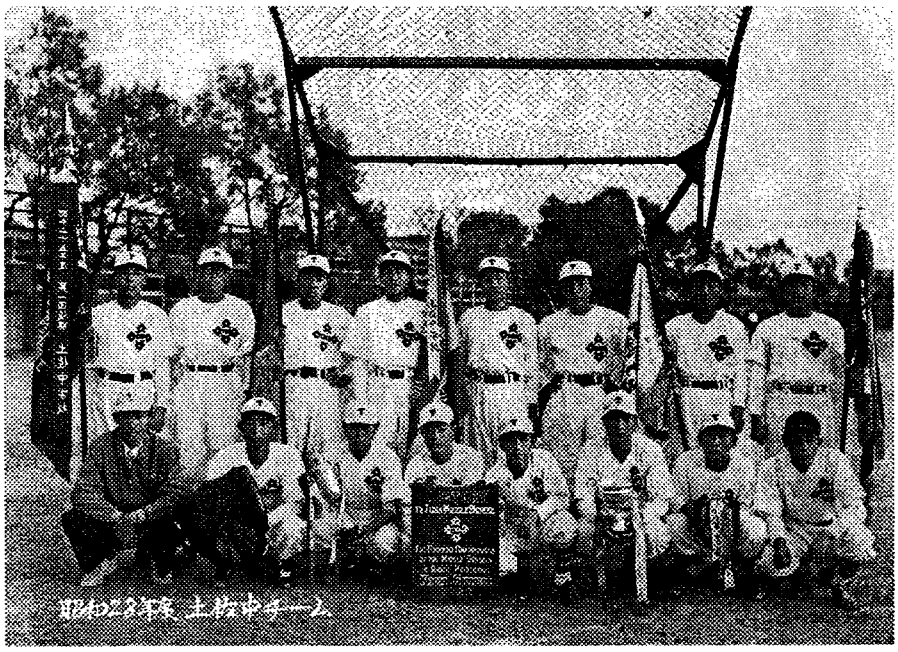
最も大切な夏の大会を前にして上田投手が負傷、出場不可能となった。私がすべての試合を投げることになり、準々決勝までの３試合はいずれも完封で勝つことができた。その間、チームはまさに鉄壁の守備陣で無失策、盗塁も一個も許していない。ストライクを投げてさえいれば得点されないのである。私には四球を出さない程度のコントロールはあった。新聞には、バックの攻守に助けられて好投、と毎試合書かれることになった。記者には、私が打たれない理由が解らなかった。監督やチームメートは勿論、私自身にも解らないのである。投手としての最初の経験が、このような堅守のバックを持ち、捕手にも恵まれた強いチームであったことが、私のピッチングを作る源であった。

準決勝は７回まで７対０とリードしたところで、上田投手に交代した。彼の負傷からの回復は十分でなく、２点を取られてしまった。そして、決勝戦も私が投げることになった。その試合は、両軍共にほとんどランナーが出ないまま、０対０で９回を迎えた。９回表、無死で主将の１番打者に二塁打を打たれた。２番打者の送りバントが三塁線へ転がる。ファールになれと見送るがフェアボールに止まり、内野安打となる。無死一・三塁となり、３番光内投手（高知高校で甲子園出場）を打席に迎えた。１点取られれば負けるので、迷わず敬遠して満塁にした。そこで敵がミスをした。三塁走者がスクイズと勘違いして飛び出してアウトになり、１死二・三塁となる。再び敬遠して満塁とした。これらの判断はすべて選手だけで行った。勿論、それ以外の選択は考えられなかった。次打者の痛烈なゴロが私の足元へ来た。幸運にも逆シングルに出した私のグラブに納まり、それを捕手へ投げた。続いて一塁手へと渡り、併殺が成立し、ピンチを脱した。

夏の炎天下での健康を心配した父がその友人（医者）に頼んで、グランドにくる前に毎日私は注射を

延長11回表が終わったところで、もはやこれ以上は投げられないと感じた。私には幸運がついて回る。その裏、一塁にキャプテン小川捕手を置いて、サヨナラの長打が出たのである。これで、夏の大会は４年連続優勝である。

そして秋の県体には、軟式を使う関係もあって、それまで土佐中は優勝していなかった。が、これにも楽々と優勝できた。勝つのが当然であると、勝つことの感激をほとんど感じなかった。勝つ感激を味わうのは、東大に入ってからである。なお、夏秋ともに私は無失点であった。中学時代のすべての試合を通じて、盗塁された記憶はなく、失点は合計２点にすぎなかった。１点は、７対０とリードした最終回に取られたもので、勝敗には関係なかった。また、もう１点は２点リードした中盤に、２死三塁でのボークによるものであった。素晴らしいバックがあったからこそ、勝ち続けたられたのであるが、自分達よりも強い相手の場合にも、「リードすれば必ず勝つ」という何かがこの時植えつけられたようである。




**土佐中学時代**（前列左から5人目が著者）